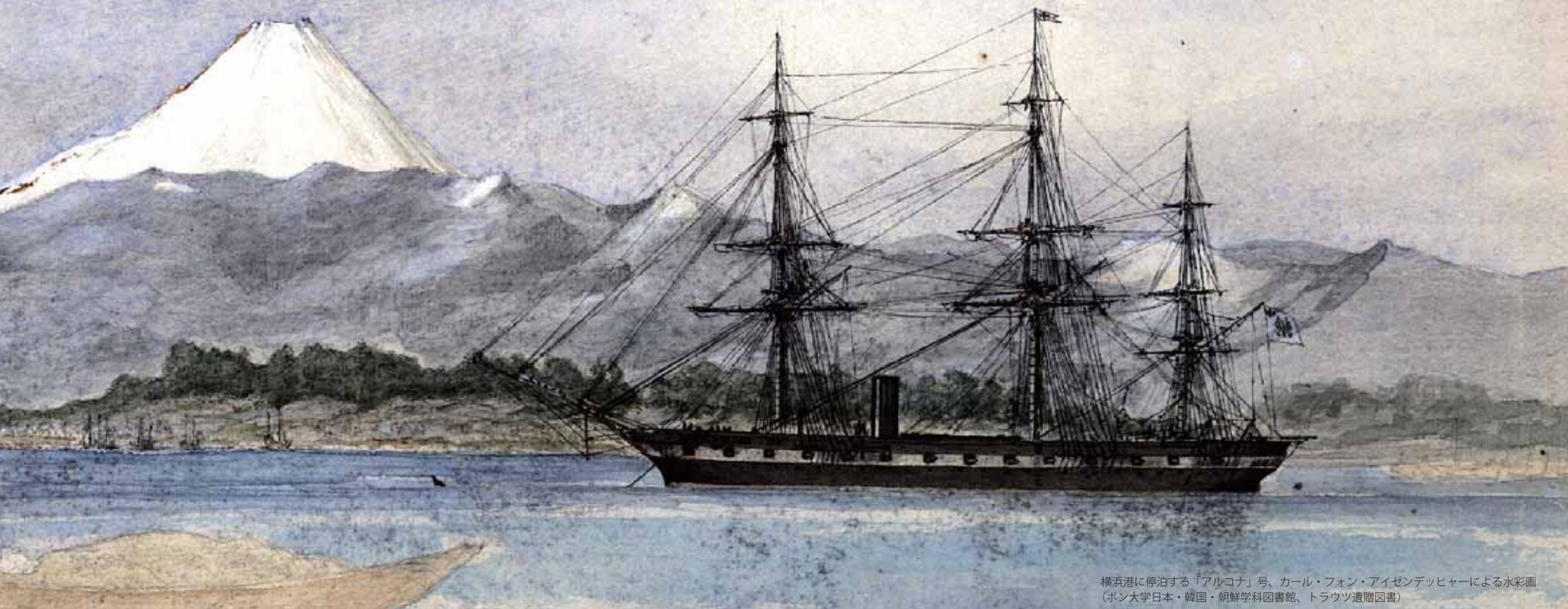


150 Jahre Freundschaft Deutschland - Japan 日独交流 150 周年



横浜港に停泊する「アルコナ」号、カール・フォン・アイゼンデッヒャーによる水彩画
(ボン大学日本・韓国・朝鮮学科図書館、トラウツ遺贈図書)



日独交流150周年
Jahre Freundschaft
Deutschland - Japan

ドイツ・ナショナルチームによる
サッカー親善試合

© picture alliance / Pressefoto Ulmer



www.dj150.jp



© ZB - Fotoreport

ライブツィヒ・オペラ座

「日本大君と亨漏生國王其親族並に世世と其互の所領臣民の間に永久の平和懇親あるへし」、1861年1月24日にドイツと日本の間で締結された条約の第一条にこう記されていました。実際、日独関係は今日、友好的で、心の通じ合ったものとなっています。

オイレンブルク伯爵率いるプロイセンの東方アジア遠征団が、ちょうど150年前の1860年秋に、現在は東京となっている江戸沖に來航しました。翌61年1月には両国は修好通商条約を締結しました。この記念の年をそれにふさわしい形でお祝いするため、ドイツと日本は、「日独交流150周年」をモットーに、互いの国でさまざまな記念行事を計画しています。



さかのぼること…



1861年にプロイセンと日本との修好通商条約締結により日独関係が始まるよりも前に、日本にやってきたドイツ人がいました。資料で名前が確認できる最初のドイツ人来訪者はミヒャエル・ホーライターでした。彼は1615年にオランダ東インド会社(VOC)から任務を受けて日本に来たのでした。

これに続く来訪者の中では、特にドイツ人医師たちが日独関係を作り上げていきました。この人たちは日本に関する報告をヨーロッパに送ったばかりでなく、逆に日本人が世界や科学の進歩に関する知識を深めるのにも貢献しました。

17世紀にあつてはアンドレアス・クライアーとゲオルク・マイスターが、そして18世紀になってからは、有名なエンゲルベルト・ケンペルが、日本に関する学問的著作をドイツ語で出版した先人たちでした。これらの著作はドイツ人の日本に対するイメージをつくりあげました。

19世紀には、ドイツ人医師フィリップ・フランツ・フォン・ジーボルトが、日本の国土や風俗、動植物について広範囲に研究しました。日本人が世界や、そして特に西洋医学に関する知識を獲得するのに貢献したジーボルトのことは、今日でもなお多くの日本人が知っています。



150年を経て

ドイツと日本は、変わることなく、互いにヨーロッパであるいはアジアで最も重要なパートナーとなっています。両国は基本的利害を共有し、外交政策においても緊密に協力し合っています。日本は中国に次いで、アジアにおけるドイツの最重要の経済・貿易相手国です。



ドイツ発ライフ・スタイル・ガイド
www.young-germany.jp

日独協会、日独姉妹都市、ゲーテ・インスティトゥート、ドイツ学術交流会で構成されるきめ細かい文化ネットワークが、さまざまな行事の基礎となり、出発点ともなっています。「日本におけるドイツ 2005/2006」に際しては、1000件以上もの文化行事が開催されました。

1990年代初めから、ドイツで学ぶ日本人学生数は約50%、日本にいるドイツ人学生数は約40%増加しました。ワーキングホリデー制度が導入された2000年以降、毎年約500人の日本の若者と約400人のドイツの若者がこの制度を利用して互いの国に滞在し、見聞と知識を広めています。



各種記念行事

いよいよ始まります! 「日独交流 150周年」が2010年10月16日に東京横浜独逸学園で大規模に行われるオープニングと共に開幕します。スポーツ、ゲーム、アトラクション、音楽、そして参加型プログラムなどがあります。一緒に祝いましょう。一連の記念行事のなかでハイライトとなるのが、2011年10月2日と3日に横浜港大さん橋で開催される大規模行事のドイツフェスティバルです。ステージプログラム、映画上映、多彩なスタンド、すばらしい料理など、楽しい文化と出会いの祭りに皆様を心からご招待いたします。



2010年10月16日 12時~18時
東京横浜独逸学園でのオープニング

© DSTY/Wels



2011年8月 ドイツロックフェスティバル

© www.colourbox.com



2011年10月2日-3日
横浜港大さん橋でのドイツフェスティバル

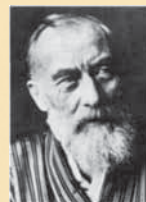


ものしり情報

日独の友好関係はオイレンブルク遠征団がやってくるずっと前から始まっていました。例えば、日独の「陶磁器交流」はこの正式な関係より倍も古いものです。というのも、日本の柿右衛門様式磁器の品質の高さについては、ヨーロッパでは17世紀にすでに高く評価されていたからです。1708年になってようやく、ザクセン公国がヨーロッパで初めて磁器の製作に成功しました。1710年以来300年にわたって、マイセン磁器製作所が「白い金」を生み出しています。



© Staatliche Porzellan-Manufaktur Meissen GmbH



1876年、ドイツの内科医エルヴィン・ベルツは草津を訪れました。ベルツは日本の近代西洋医学の父の一人として知られており、天皇の侍医でもありました。彼は草津温泉の治療効果について研究し、草津を海外にも紹介しました。ベルツはまた熱心なスポーツマンであり、講道館柔道の精神的創始者の一人とされています。彼は時代遅れとされていた柔術のもつ現代的意義を説くことで柔道の創始者を支援し、さらに自らの体験を本にまとめて出版しました。これはヨーロッパ、そして特にドイツで大きな関心を引き起こしました。

第一次世界大戦の間徳島には、当時ドイツの植民地であった中国の青島をめぐる戦いの中で日本軍の捕虜となったドイツ人が抑留されていました。1917年4月から1920年の解放まで、坂東捕虜収容所に一時は1000名近くのドイツ人兵士が収容されていました。日本軍の収容所長は捕虜に対して非常に寛容な態度で接しました。地元住民との交流やベートーベンの第九交響曲の日本初演などの催しを通じて、ドイツ人と日本人との間に互いに尊敬し合う良き関係が生まれました。



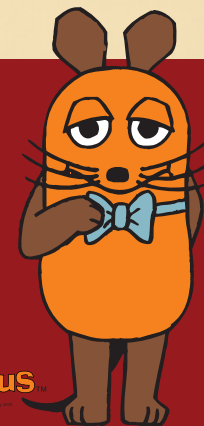
出典：横門市ドイツ館



出典：株式会社ユーハイム

日本で人気の高いバウムクーヘンは、ドイツ人菓子職人カール・ユーハイムが日本にもたらしました。ドイツの植民地青島で菓子店を営んでいたユーハイムは、第一次世界大戦中に日本軍の捕虜となりました。彼は1919年にドイツ物産展示会用に日本で初めてバウムクーヘンを焼いたということです。第一次大戦後、ユーハイムは横浜に住み、洋菓子店を開きました。そして、この店は関東大震災の後神戸で洋菓子会社として再出発しました。洋菓子店ユーハイムから出発したユーハイム・グループは本拠を神戸に置き、今日に至るまでドイツのレシピにしたがって洋菓子を製造しています。

最新の情報は
www.dj150.jp
をご覧ください



Maus